



# 太平洋の仲間達



南洋貿易株式会社  
銭亀 まりあ

私ども南洋貿易は、1890年より120余年に亘り太平洋の島々で貿易を行っています。戦前からサトウキビ産業を営んだり、日本人移民向けに食料などの輸出を行ってきました。特に、ミクロネシアの島々でNBKと言えば誰もが知っているように、深く地域に根差したビジネスを代々行っております。現在は、ミクロネシアだけではなく、島嶼国であるスリランカやカリブの国々でも幅広く仕事をさせていただいております。扱う商品も食料品に限らず、機械類、船、トラック、バス、その他車輛、建材、そしてODAのプロジェクトなど多岐にわたっております。とりわけ注力しているのはグアム、サイパン、パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル等、比較的日本から近い島々ですが、今回はそことは異なる島をご紹介します。

ニュージーランドから北東に3時間ほど飛んだ南半球に位置し、日付変更線のすぐ近く、ポリネシアに属する約170の島からなるトンガ王国です。トンガと言えば、かぼちゃ、ラグビーなどが有名で、昨年のオリンピック開会式では、伝統衣装を身に纏って旗手を務めた選手が話題になりました。南洋貿易は1970年代より、学校や空港、港湾、病院などの建設から、現地の産業を発展させるべく水産センターや手工芸文化センターの設立、島間を結ぶ連絡船の供給等々の仕事をさせて頂いてきました。近年では、2013年から2015年にかけて、富士電機株式会社

太陽光発電設備



と当社で受注したマイクログリッドシステムが大きな仕事でした。マイクログリッドシステムとは、太陽光発電と既存のディーゼル発電をコントロールし、太陽光で得た電力を最大限生かしつつ、蓄電池を用いて電力の安定化と燃料の省エネ化を図るものです。このシステムでは日本のODA設備を使うだけでなく、ニュージーランドからの無償援助で既に供与されていた太陽光発電もシステムの一部として組み込んだ、非常に画期的なプロジェクトでした。資源の限られている島嶼国だからこそ、このようなプロジェクトが島の人々の生活を支える貴重なものとなります。

2015年、ラグビーW杯の行われていた最中の10月、初めての出張で、トンガタブ島にある首都ヌクアロファを訪れました。小さな空港を出ると、民族衣装を着た人々が伝統音楽を演奏して迎えてくれました。ガリバー旅行記に出てくる巨人の国のモデルとなった国とも言われており、島の人はとても大きな方でしたが、皆とても優しく、穏やかな性格の方ばかりでした。島には信号がなく、道路を走っていると道端には鶏や豚、牛がいる、とてもどかな国です。街灯はまばらにしかないので、夜には満天の星空を見ることができます。日本からは見ることの出来ない南十字星を探そうとしましたが、あまりにも星の数が多すぎて探せないほどでした。空き地ではラグビーの練習をしているチームを多数見かけ、本当に親しまれている

マイクログリッド引き渡し式



スポーツなのだ実感しました。W杯が開催されていたこともあり、お世話になった政府関係者の方からは、記念にトンガラグビー代表のユニフォームをプレゼントして頂きました。

今回は、日本国際協力システム(JICS)を通じた無償資金援助の一環で建機を納め、そのトレーニング及び引渡への立ち会いが、トンガ訪問の目的でした。ニュージーランドのメーカー代理店からトレーナーが来ており、マニュアルやスライドを使用した座学の後に、実際に建機を動かすトレーニングを行いました。伝統衣装であるスカートのような服を着て参加している方もおり、トンガラしさを実感することができました。話だけ聞いていた現地のバイヤー、お世話になっている方々、そして街並みなどを実際に見ることができ、仕事に対する意欲がますます湧いてきました。マイクログリッドシステムやバイオラ病院など、過去に行ったプロジェクトを見に行く機会もありました。実際に、私達の仕事がトンガの人々の暮らしに役立っているのを目の当たりにすることができ、とても感慨深かったです。

トンガは、太平洋プレートとインド・オーストラリアプレートの重なるすぐ近くに位置しており、日本と同じように地震や津波などの自然災害の危機にさらされています。2009年に起きた地震では3mの津波が離島に届き、沿岸部の建物は全て流され、9名の

納入された油圧ショベル（日立建機製）



トンガ人技術者と筆者



死者を出す被害が出たそうです。小さな島国だからこそ防災に力を入れなければいけないと、政府関係者はおっしゃっていました。メインアイランドであるトンガタブ島の海岸沿いには、至る所に避難経路(Evacuation Map)が置かれており、高波や津波から逃げられるように標識も点在してありました。今回供与した建機は、防災対策工事に役立ち、復興のために離島でも使用すると、とても喜んで頂きました。

このプロジェクトを通し、取引相手と顔を合わせて互いに信頼関係を築くことができ、より良い仕事ができるようになるのだと実感しました。初めての太平洋訪問で、どの国も日本同様、地震、津波、サイクロンなどの自然災害の危険にさらされていることを再認識しました。島国である日本の会社で働き、南洋に根付いた南洋貿易にいるからこそ、できる仕事を行っていきたく強く思いました。これからも、少しでも人々の生活に役立てるようにしていきたいです。

写真提供：銭亀まりあ

## パラオ総選挙報告

## トミー・レメンゲソウ Jr. "ほろ苦い" 大統領 4 選

上原 伸一

2016年11月1日(火)に上・下両院の国会議員の総選挙と正副大統領の選挙が行われた。パラオの国会議員は上院下院とも4年に1度行われる総選挙で選出される。アメリカ型の大統領制を敷くパラオでは、任期中の議会の解散はない。総選挙の際には、やはり任期4年の正副大統領選も行われる。ただし、正副大統領については、それぞれ3人以上の立候補がある時は予備選挙が行われることになっており、昨年は9月27日(火)に予備選挙が行われた。

正副大統領予備選挙直前に行った現地取材に、現地からの諸情報を併せて昨年のパラオの選挙を報告する。

\*以下、肩書きは特に断らない限り2016年のもの。また、名前の表示に当たっては現地でよく使われている名称を使用。投票結果では、白票、無効票その他の票数は省略。

## &lt;1&gt;正副大統領予備選挙

## ○立候補

パラオの正副大統領選は投票日の1年以上前から始まる。本格的な選挙戦は選挙の年になってからだが、その前年から立候補を巡って様々な動きが出る。

2015年中盤には、レメンゲソウ大統領の他に、スランゲル・ウィップス Jr. 上院議員、カミセック・チン上院議長、アントニオ・ベルス副大統領、前大統領ジャンセン・トリビオン氏等が大統領候補として取りざたされていた。

チン上院議長は2008年の大統領選挙で予備選では1位になりながら、本選でトリビオン氏に逆転されていた。前回2012年の大統領選では立候補が予想されていたが、2期連続の大統領の後1期上院議員を務め、再度大統領に立候補したレメンゲソウ氏に譲って立候補をしなかった(パラオでは大統領は連続2期しかできないが、間を開ければ改めて立候補する事は出来る)。同じペリリュ出身で親戚である2人は話し合いを行い、チン氏は上院議員に立候補し、それぞれ当選を果たした。チン氏には相当数の支持者が居り、今回は大統領への立候補を望む声はかなりあった。しかし、チン氏は2015年末には大統領選には出ないことを明確にした。今回も話し合いによる調整が行われた結果と思われるが、チン氏は2016年4月に心臓病でマニラの病院に入院しており、この時点で既に健康に不安があったのかもしれない。

い。

前大統領のトリビオン氏も2015年末までに立候補をしないことを公にしている。根強い支持者はいるものの、前回の選挙に比べ特段支持の広がりが見られないことなどから早めに決断したものと思われる。

一方、スランゲル上院議員は2015年の8月段階で既に立候補の意志を公にしていた。スランゲル氏は、2008年に父親が大統領選に立候補し予備選で敗退した後、ライトイン(書き込み投票)で上院議員に当選。それもトップ当選であった。パラオでは、立候補をしていない人に対して投票してもそれは無効票にはならず、得票が当選ラインに乗れば正式な当選者と認められる。ただし上院議員ではそれまでライトインで当選した人はいなかった。2012年の総選挙では正式に上院議員に立候補してやはりトップ当選を果たしており、この時は弟のメイソン・ウィップス氏も4位で上院に当選している。スランゲル氏の一家は、若者中心に広く人気があり、一家が経営するスランゲル&サンズは今パラオで一番勢いのある民間企業で、選挙資金も豊富である。若者中心に大統領へという声はかなり大きくなっていったが、彼が大統領選出馬を明確にした時は年配層を中心に驚きがあった。彼はレメンゲソウ大統領の妹と結婚しており、レメンゲソウ氏の義理の弟に当たるからである。レメンゲソウ政権は大きな発展をパラオにもたらすことはなかったが、特段のトラブルや問題なく、中国からの観光客の急増で経済的には上向きであり、レメンゲソウ氏が目玉として2013年の大統領就任当初から推し進めてきた海洋聖域構想は内外の賛同を集め、法律成立に着実に向かっていた(2015年10月に成立)。レメンゲソウ氏の立候補は確実な情勢で有り、伝統的なパラオ社会では、親戚・姻戚関係での対立は調整により避けるのが当たり前であるので、スランゲル氏はまだ1期待って2020年に立候補するのが順当だろうと思われていたからである。実際、今回上院に立候補していれば当選は確実であったし、その上で次回に大統領に挑戦すれば当選の可能性は相当に高いことは容易に予想できた。

上院副議長だったキャシイ・ケソレイ氏の死去を受けて行われた補選で2015年末に上院議員になったサンドラ・ピエラントッチ氏は、年明けの2016年1月早々に大統領選立候補を表明した。彼女は、2000年の選挙

でパラオ初の女性副大統領(今の所唯一の女性副大統領経験者)に選出され、2012年にも大統領に立候補したが、予備選で17.8%の得票に終わり本選に進めなかった。

副大統領のアントニオ・ベルス氏は2016年に入ってから立候補の動きは見せず、政界から引退するとしていた。ところが、立候補締め切り1週間前の7月27日に届け出をして人々を唖然とさせた。何の準備もなしに予備選54日前の立候補は誰が見ても無謀な行動であり、何故立候補したか真意は不明であった。

副大統領選には、2015年8月にはレイノルド・オイロー上院議員が立候補を表明、引き続きヨシタカ・アダチコロール州知事が立候補。ミルブ・メチュール上院議員は選挙活動はしていたが、公式発表は1番遅くなった。それでも、2015年のうちにこの3人の立候補が確定し、それに続く立候補者は現れなかった。この3人のうち誰が有力であるかについては、予備選の直前の段階でも、特段の情報や予測は見られなかった。

## ○選挙戦と予備選の結果

パラオの大統領選挙は激戦になることがしばしばである。1980年の第1回の正副大統領選挙では、大方の予想に反して、ハルオ・レメリク大統領、アルフォンソ・オイテロン副大統領が選ばれた。1988年には当選したニラケル・エピソン氏と次点のローマン・メチュール氏の差はわずか31票で、ローマン氏は開票に異議を唱え裁判闘争となった。これを契機に、正副大統領選において候補者が3人を超える時は予備選挙が行われるようになった。また1992年の選挙では、現職の大統領であった(当時)エピソン氏、副大統領であったクニヲ・ナカムラ氏、弁護士のジャンセン・トリビオン氏が立候補し、予備選で現職のエピソン氏が敗退、1位通過のジャンセン氏と2位のナカムラ氏の差はわずか63票差であった。本戦ではナカムラ氏が逆転し、134票差で大統領に当選した。2008年の選挙でも、予備選挙では副大統領(当時)のチン氏が501票差をつけて1位になったが、本戦ではトリビオン氏が212票差で逆転した。

今回の選挙は、こうした歴史を有するパラオの中でも最もハードな戦いであったと言われている。立候補者は4人だが、実際の所は、レメンゲソウ大統領とスランゲル上院議員との戦いであった。

サンドラ氏は、「パラオで女性が社会のトップになるのはまだ無理な状況。でも、今私が立候補しないと今後の可能性を狭めてしまう。私にとっても今回が最後の機会と考え立候補した。」と筆者のインタビューに答えて

いる。出馬することに意義があり、当選は半ばあきらめている感じであった。彼女の選挙戦術は、大がかりな集会等は開かず、小さな集会で自分の主張をじっくり話し、同調してくれる人を通じて支持者を増やしていくというもので、以前と変わらなかった。彼女の主張は、今パラオでは家を持たず生活に苦勞する人々が多くいる。少しずつでも民間産業を興して雇用を創出し、人々の生活を良くすること、それに向けて国が援助をすること等で

ある。結果は833票で2012年の得票にも届かず3位で敗退した。

ベルス氏は立候補が遅れたこともあり、選挙運動も殆ど目立たなかった。結果は274票で最下位であった。むしろ274票も良く得られたものである。予備選を勝ち抜く可能性はなく、立



サンドラ・ピエラントッチ氏

候補も締め切りギリギリで、何故の立候補かも今ひとつはっきりしていない。予備選での得票は、支持というより、親戚には投票する(本当の投票は本選で行使できる)というパラオの慣習に依るものと考えられる。

スランゲル氏の選挙戦術は、ネット時代にあわせた新しいものだった。SNSを始めとするネットを積極的に使い、支持の拡大に努めた。また、ネットにに限らず、新聞やテレビ、ラジオなどのマスメディアを最大限に利用



スランゲル・ウィップス Jr.氏

し、メディア露出による浸透を図った。彼の支持基盤は若者で有り、若者をしっかり捕まえることを狙った戦術である。パラオでは18歳以上が有権者なので、この戦術は有効である。実際、各種メディアが行った選挙前の調査では、若者の間ではスランゲル氏の

人気は明らかにレメンゲソウ氏を抜いていた。伝統的な大がかりな選挙集会やパーティはあまり開催しなかったが、キャンペーンロゴを入れた帽子やTシャツを配ると言う旧来のやり方は踏襲していた。

資金は十分なので、Tシャツも色のみならずサイズも各種揃え広く配布していた。彼の選挙でのスローガン